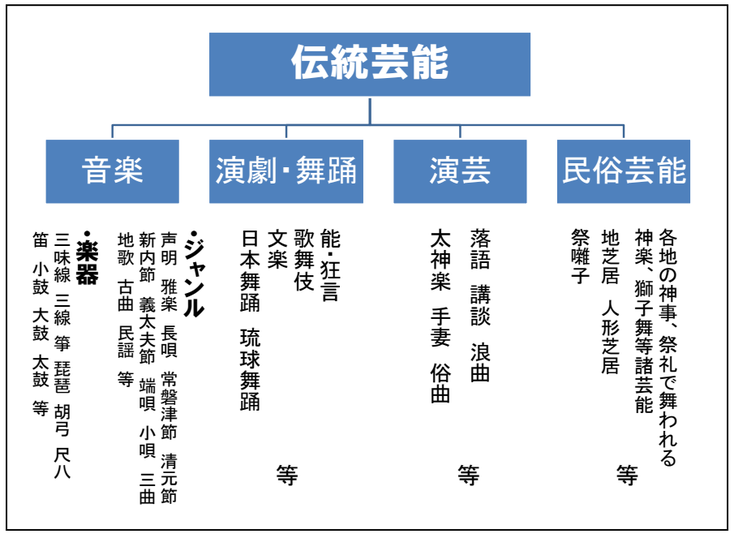
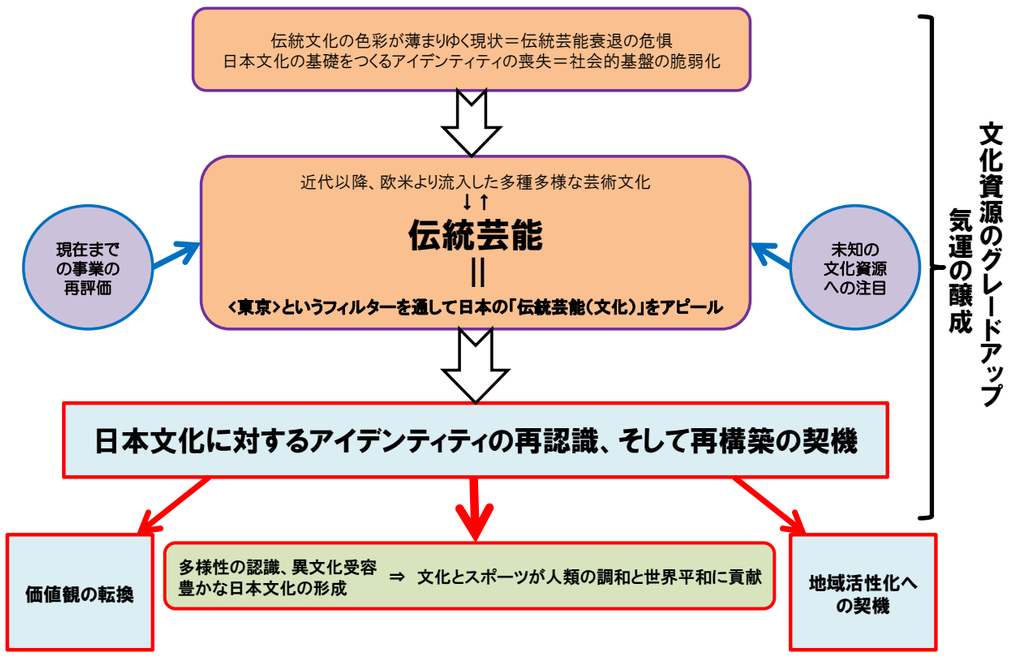
2020 年東京オリンピック…「未来」の日本の文化シーンを見据えて

日に日に日本文化の色彩が薄まりゆく現代社会において、今こそ「伝統」という言葉の持つ意味を再考し、日常生活のレベルで「伝統」を身近に感じる機会を、現実的かつ積極的に創出してゆくこと、そして自らの存在価値を日本文化に感じ、自らの拠り所を日本文化に求めることに大きな意義を見出します。この意義を、大きな危機感と大きな希望を抱きつつ、世代を超えて共有することこそ必須かつ急務の課題と考えます。

2020 年東京オリンピック開催を、「日本文化に対するアイデンティティの再確認、そして再構築の契機」と捉え、日本各地で生まれ、時代を超えて継承されてきた多種多様な＜伝統文化＞を顕在化かつ活性化させます。そして、「東京という街」と「オリンピア精神が持つ力強いメッセージ」という二つの発信力により、日本文化の継続的、永続的な発展に寄与すると同時に、豊かな想像力に彩られた日本文化が、人類の調和と世界平和に貢献することを目指します。





日本国内への発信

①既存の事業の抜本的見直しと再構築⇒より統合的で求心力のある企画を、より効果的な方法で展開するために

＊伝統芸能フェスティバル「東京発・伝統 WA 感動」（主催：東京都、東京都文化発信プロジェクト室他）の実施内容と方法
既存の劇場・ホール、ライブハウス、スタジオ、他諸空間における伝統芸能関連公演の機会拡大
各種イベントへの伝統芸能の出演機会の拡大

＊「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」などアーツカウンシル東京主催事業の拡大と継続的実施
伝統芸能版“ラ・フォル・ジュルネ”様イベント（鑑賞、レクデモ、W.S.等総合体験型）の実施

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・周知のためのプログラム＝「見る、聴く、触れる」 伝統芸能の新たな魅せ方の工夫

②＜伝統芸能＞拠点地域の形成（①と連関）

＊既存の施設（能楽堂、寄席、劇場・ホール等）の活用
＊拠点地域でのイベントの継続的実施（神楽坂　等）
＊「点から線、線から面へ」継続的・構造的な取り組みのために
＊新たな発信拠点づくり（＝伝統芸能センター・仮称）の検討
＊人材育成（実演家、ファシリテーター、制作者等）、アーカイブも視野に

③＜伝統芸能＞教育基盤の充実

＊高等学校を中心に「日本文化」等の科目を設け、授業内で恒常的に伝統文化を扱う等、伝統芸能教育の確立
＊（財）地域創造「邦楽地域活性化事業」等をモデルにしたアウトリーチ（鑑賞・体験）事業の拡大
⇒教育機関（就学前教育～大学）、市町村の文化事業、子ども劇場等 NPO 鑑賞団体等との連携
＊音楽大学におけるカリキュラム及び教員養成システムの見直し

④全国各地域の文化への再注目と価値観の再構築

＊各自治体と連携した事業の実施や地域情報の PR 強化
＊実演家、観客（日本人、外国人）の恒常的な往来・交流経路の創出
＊地域の文化発信拠点としての自治体及び公共ホール文化事業担当者の研修、交流の強化

⑤メディアとの連携

＊伝統芸能関連情報をすべて網羅したポータルサイト制作・運営
＊現行メディアの活用方法の検討

海外への発信

①在外公館と各芸能団体との連携（情報公開、人材交流、ネットワークづくり　他）
②日本全国各地域の文化芸術資源と観光との連携

伝統芸能プロデューサー
共立女子大学非常勤講師
（有）古典空間　代表　小野木豊昭